

廣池千九郎の『道徳科学の論文』における 心づかいに関する一考察 その2 —— 高い道徳性を備えた人間像を中心に ——

Bayasgalan Oyuntsetseg

目次

1. はじめに
2. 廣池千九郎の『道徳科学の論文』における最高道徳を体得した人の特徴
3. 廣池千九郎の『道徳科学の論文』から推測される品性の高い人の特徴
4. むすびに

1. はじめに

報告者は今までのモンゴルの道徳教育に関して、徳目をどう組み立て構造づけ、それをどのような人間像として描いているのかといった、道徳教育を方向づける理念について、モンゴルの社会主義時代の道徳教育に遡って研究を続けてきた。研究を通じて見えてきたことは、道徳教育で目標とする人間像が時代によって常に変わってきたことである。1920年代から1990年代までの社会主義教育の理念を模索してみると、理想として社会主義的人間像を掲げ、労働教育を重視していることがうかがえる。道徳教育は厳格な思想教育を通じて社会の政治的および思想的統一、国民の絶対的な支持と信頼、同志的団結と協力を基本とする社会主義的社会関係を発展させるために、重要な武器と位置付けられていた。その結果、国家権力による価値一元化への圧力が強く、個人の思想、信条、言論の自由は保障されなかった。その一方、一貫して強調されたのは、学習に熱心に取り組むこと、祖国愛、集団と学校の名譽を重んじること、労働への積極的参加、共同生活のルールを守ることであった。従って、こうした資質が学校教育における社会主義的人間像を形作る重要な要素となっていた。このような資質は、現在のモンゴル社会でも同様に求められているものである。1990年代に入ると道徳的価値について一方的に子どもに教える指導方法が一般的となり、様々な規範を子どもに教え、様々な道徳的価値について「知っている」理想的な人間像に向かっての人づくりが目指されていた。

さらに、2000年代に入ってからモンゴル民族の遺産、民族の誇り、歴史、伝統習慣に

関する知識が道德教育の重要な項目となり、重要な習慣について知っているだけでなく、習慣化している人、言い換えれば、民俗文化をも習得したモンゴル人を望ましい人間像とするようになってきている。そして、最近（2014年以降）では、より良く生きたいという要求を持ち、人間の生活における善行悪行について自ら考え、自ら判断し、自ら善行をする誓いを立て実行できる人間が理想として挙げられるようになってきている。このような人間像の変遷から、道德教育は強制的なものから自発的に生起する道德性の育成を目指すようになってきていることが言える。そこで子どもが自発的に道德を行っていきけるようにどう育てていくべきか、自発性を育てるために教員はどのような指導力を発揮すべきかなどについて、教員が自ら道德を学び、道德に関する基本的な考え方を確立するとともに、自らの人間性を磨くことがますます重要になってきている。

この点では、廣池千九郎の『道德科学の論文』（以降、『論文』）は大変示唆に富んでいる。『論文』では、「道德教育は（中略）形の上から各個人に道德的行為を強制するのでありますから、これは道德の本質に適合する方法でもなく、且つ教育の本質にも適合するものであります」（九冊目 p.41）、第6節「道德は強制的より自発的に進む」（三冊目 p.150）とし、自発的に自己の運命を開拓する人間、他者の弱さを受容したり、むやみに批判しない、他者の幸福と成長を願い、自分から他者に歩み寄る寛大な人間が描かれている。そこに述べられている品性の高い人の資質は、道德教育に携わる教員自身に求められる資質を考える上で重要な材料となる。

本稿では、『論文』における品性の高い人はどのような特徴を持つのか、その人はどのように行動し、考え、感じているのかについての考察を試みた。品性の高い人の資質を、教員のモデルとして考える（提案する）ことは、道德教育の指導法を模索している教員らに、有益な手がかりを提供することになるとと思われる。

2. 廣池千九郎の『道德科学の論文』における最高道德を体得した人の特徴

前稿「廣池千九郎の『道德科学の論文』における心づかいに関する一考察 その1」¹⁾では、『論文』における心づかいの特徴として次の6つを取り上げた。すなわち、自己の肯定（①人生を導く肯定感、②自己の存在を意味づける肯定感、③自他共に生かす肯定感、④自己を客観的に見つめる肯定感、⑤世代間の繋がりを意味づける肯定感）、不完全さの自覚（①人間が弱い存在であるという認識に基づいた不完全さの自覚、②世代間の過失を包含した不完全さの自覚、③自己を厳しく律する不完全さの自覚）、自然の法則の捉え方（①「良心」としての自然の法則、②人生の指針としての自然の法則、③自己からも働きかけのできる自然の法則、④善として身につけることができる自然の法則、⑤道德実行を促がす自然の法則）、感謝（①他者の苦勞に対する感謝、②世代を貫く価値観に対す

1) 「廣池千九郎の『道德科学の論文』における心づかいに関する一考察 その1」公益財団法人モラロジー研究所『モラロジー教育』第76号、pp.1-13、平成27年12月

る感謝、③すべてを温かく包む感謝、④自己成長への感謝)、つながり (①礼儀を超えたつながり、②制約のないつながり、③道徳を共有する世代間のつながり、④自他を大切にすつながり)、穏やかな性質 (①「伝統尊重」の精神から生まれる穏やかな性格、②「人心救済」の精神から生まれる穏やかな性格、③自己への慈悲の精神から生まれる穏やかな性格、④感情に振り回されない穏やかな性格) である。

これらの概念を通じて、「自己を否定する」のではなく、あくまで「自己を肯定」するので、前向きに生きられる人間が描かれていることが『道徳科学の論文』の最も大きな特徴の1つであるように思われる。それと同時に、人間は「不完全」であることが認められているからこそ、これからより完全になろうとする強い意志が生まれているように見受けられた。

本稿では、『論文』における「最高道徳」を体得した人とはどのような人なのかについてさらに考えてみたい。『論文』に記述されている品性完成をした人 (真に救われた人) の特徴には、いくつかの性質が含まれている。例えば、「(前略) 慈悲寛大の精神となり、いかなることにも自己反省をなす精神になるのであります」(八冊目 p.225)、「(前略) 自分より眼下の人々に対し、肉親と他者とを論ぜずに、公平に且つ真に一斉にこれを肉親の子供として愛することが出来るのであります」(八冊目 pp.233-234)、「(前略) 一切の心使い・言語及び行動には政策とか、虚偽とか、威嚇とか、破壊とかいうごときことはないのであります」(八冊目 pp.236-237)、「(前略) 真の親心をもって、上に向かっても下に向かっても、すべてこれを育つる精神を持つのであります」(八冊目 p.247)、「(前略) 自分の義務を先行することと、義務先行者に対して報恩することとを心掛くる」(八冊目 p.253)、「その精神作用が低く優しく柔らかであります、(中略) その人のおところの家もしくは室の空気まで自然に平和の有様を帯ぶるに至るのであります」、「(前略) その最高道徳の実行者のおる所には、自然に他の人々が集まってくるようになるのであります」(九冊目 p.236) などである。

その中で特に注目される心づかいは、自分自身を大事にするとともに他者を大事にすること、慈悲、人心開発救済の意識から成り立っている。思いやり、慈悲、人心開発救済の意識は、義務先行、伝統報恩の原理に根ざして、他の人々に積極的に関わり、他者のことを深く配慮しようとするものである。具体的には、「(前略) 最高道徳的行動をなすのは、自己の過去において無意識的もしくは意識的に犯せるところの人に対する罪を償却するためであるという精神作用をもって行動するのであります」(九冊目 p.236)、「(前略) 最高道徳では祖先以来の過去の借財返済のためとして慈悲の心になり、いかなることをも自己に反省する (後略)」(八冊目 p.368)、「道徳実行の動機は、自己の過去における過失もしくは意識的欠陥の補充である (後略)」(一冊目 序p.117) などである。

次に大きな特徴は、どのような問題に直面しても自分がどのような状況に置かれても、人間関係の不調がある場合においても、そのことによっていたずらに自分の精神を乱すことなく、常に自己反省し、心安らかに生きられる人間が描かれている。「真に相手方及び一般社会を愛する心と人心の開発もしくは救済の心を持っているから、その精神作用は

常に平和寧靜であります。他者に対して柔らかに触れるから、実に美しく且つ力強く、自然にその接する人の心を融和する（後略）」（七冊目 pp.111-112）などである。

この品性の高い人間像は、廣池千九郎の自らの体験により明確化されているところもある。どのような状態にあっても平常心をもって対処できる人間、強い信念を持っている人間、自分への憐みや劣等感に落ち込まない人間、向上心の強い積極的な人間、何らかの点で合わない人がいたとしても、その存在を認め、自他ともにより良い生きかたを目指す人間が描かれており、品性の高い人間の人格に対する興味深い見解が示されている。次に、この品性の高い人の特徴についてさらに詳しくみてみたい。

3. 廣池千九郎の『道徳科学の論文』から推測される品性の高い人の特徴

ここでは、何が徳目として大事かということより、どのような思考（心づかい）が道徳的心情（精神）や感情、行動などに変容をもたらすかということに注目しながら、『論文』における品性向上の原理から推測される品性の高い人の特徴について取り上げ、その性質についての解釈を試みたい。具体的には、「学ぶ心（すべてを心の成長の面からとらえる視点）」、「将来への確信」、「大きな存在の一員という認識」を持つ人間についてである。

（1）常に学ぶ心（すべてを心の成長の面からとらえる視点）

『論文』では、最高道徳の学びと実行を通して、「心の成長」を目指すことの大切さについて、そして、自分自身の「心の成長」を実感する分だけ「幸せ」を感じられると書かれている。

品性の高い人は、心の成長（品性向上）という高い志に動機づけられている。その実行しようとする最高道徳は、知識（伝統の重大さや大切さに関する理解と知識など）を要する。その人生の帰着点は、成熟した人間である。品性完成した状態の理想的な人間像の中には、常に自他を伸ばし発展させようと努め、他者に対しても上からの視点ではなく互いに学び合おうとする、さらに、自分より年長の人や上の人に対しても慈悲心をもって開発し救済しようとする精神を持ち、どうすればその目標に行き着くことができるかについて常に学ぶ心構えができている人が描かれている。

品性向上の中心的な部分は、自分自身の本質（自分は誰なのか。どんな短所や長所、義務を持っているのかなど）、伝統の本質（国家や祖先の由来などについて漠然とした抽象的なイメージではなく具体的な知識）について学び、理解し、実行することにある。そもそも「最高道徳は自己の品性を形成せんとする動機および目的から出発」しており、「最高道徳の実行は自己の発達にその基礎が置かれておる（後略）」（七冊目 p.4）のである。「精神の小さき小人物は、自己の学問・技芸・財産その他社会の地位等ある一つの長所を有すれば、これをもって無上の誇りとなし、もはやそのほかには何物をも学ぶ心なく、いわんや道徳の修養等思いもよらぬことである。しかるに、最高道徳は、いかに多くの長所を併有するも、終身わが心を磨きて、ついに子孫万世不朽の高徳を積むに至らしむるので

あります」(九冊目 p.363)とあるように、品性完成の過程はすべて学習そのものであり、それには学ぶ心が大切である。実際、経験や知識がないと人を育てる(人心開発救済)ことは容易ではないように思える。例えば、『論文』で示している「自己の学問・経験その他種々の知識をもって相手方の理性を刺激し、もって最高道徳の原理を理解せしむる」(八冊目 p.196)には、相当の力量や知識も問われるので、常に自分の知識や能力、態度(例えば、他者への感化力、他者を導き安心を与える力、利己心を抑えたり感情に振り回されずに自己を制御する力、自分にとって不利な場合でも他者のために喜んで寛容な態度を取り、自分の感情を知性でコントロールする力)を開発し、学ぶ心が要求される。品性の高い人の心づかいは、理性、知性、意志の働きの全てを意味している。

品性の高い人には、あらゆる物事を貴重な教材とし、そこから何らかの教訓を得ようとする積極的な姿勢がうかがえる。このような人は、困難からも学べるものを見つけ出し、そこに意味を持たせる心構えが出来ている。「いかなる難事に遭遇するも、みな精神的に自己反省し、且つかかることも結局神の自分に対する恩寵的試練として、喜び且つ感謝してこれを受くるのであります」(七冊目 p.111)のような学ぶ心を持っていれば、物事にゆきづまるといようなことは少なくなり、どのような物事に直面しても貴重な経験として受け止め、立ち上がり、対処できるようになるかもしれない。

品性の高い人は、人類の安心、平和、幸福を実現するというはっきりした目的のもと、自己の品性向上に重大な関心をもってることが言える。「自己の品性を造ることが最高道徳実行の最初の目的であって、且つそれが終極の目的であるのです」(八冊目 p.197)のである。ただし、品性向上という目標が自己の内部のみに限定されていない。同時に他人にも関心を持ち、彼らの成長についても自己の成長と同じく配慮する。そして、あらゆる人間に品性を向上してもらいたいと願っている。「先方の人の学問もしくは道徳心が低くして欠点はあっても、(中略)その人のなすところに留意してその善所を学び、もって自己の欠点を補うことを勉め(後略)」(八冊目 p.245)というように、常に学ぶ心を維持するには、自他ともどもに品性を向上するよう強く願い望むことが求められる。

品性の高い人の大きな特徴は、すべての出来事に対し、心の成長の面から意味を持たせようとすることである。ここで注意しておかなければならないのは、道徳的行為の目標として自分だけの幸福があげられていないということである。幸福は品性向上によりおのずと実現されるものである。よって、「真に自己を利益するものは学力・知力・金力・権力もしくは腕力等ではなくて、自己の最高品性である」(八冊目 p.411)、「人心を開発して品性を完成す」(九冊目 p.301)という視点に立ち、すべてを心の成長の面から捉える。すべてを心の成長の面から捉える視点は問題の捉え方も変えるように思える。問題を前向きに解釈したり、問題から学ぶことも出来たりする人が『論文』から読み取れる。そのため、自分に欠点や過ち(例えば、自己の祖先以来意識的もしくは無意識的に犯した過ち)をあるがままに受け入れる寛大さが生まれている。この寛大さは、他者にも適用される。自他を責めたり、悩んだりすることはなく、建設的にとらえ、それを償い、返済するために心を成長させ、人心の開発もしくは救済に向かって努力する人間が『論文』には描かれている。

(2) 大きな存在の一員という認識

『論文』では、宇宙・地球・自然、そして国家・社会、家族に守られ、支えられていることを認識し、自覚することの大切さについて書かれている。この自覚により、少しでもその「恩返し」をしようとする姿勢が「伝統報恩」となり、「義務の先行」という形で国家・社会・家族に恩返ししようとする意識が生まれるように思われる。

品性の高い人の関心は自己のみにおかれることはない。心に安らぎを持ち、自己を広い範囲で捉え、社会とつながろうとする。自己は大きな存在とつながっていると認識する。ただし、大きな存在の一員であるという認識はただひたすら他者に依存することを意味していない。この大きな存在とは、周りの人々、恩人、家族、地域社会、国家、ひいては自然や地球などすべてである。論文では、「諸伝統」、「大宇宙」、「相互依存」、「連帯」、「団体心」(三冊目 p.196)、「大恩」、「天地自然」、「大自然」という用語が用いられている。「宇宙の万有は相互に関連しておるのであります。されば宇宙万有の一部分たる人間は、宇宙のすべてに関連し、且つ人間相互間においてもまた関連を持っており」(三冊目 p.214)、「人間が(中略)宇宙間の系列の一員としての義務を尽くさねばならぬ(後略)」(七冊目 p.270)、「万物はみなわが身に備わっておるものであって、わが身はすなわち小宇宙である。それ故に、大宇宙の本性たる誠の心と恕の心とをもって世に立つならば、自然に大宇宙の本性に合することが出来(後略)」(六冊目 p.152)、「各自に立派なる品性を形造り、しこうしてその自己の品性を他人の精神に移植してこれを開発し、(中略)次にその人及びその次々に開発されたる人々とともに、この世界の完成を図るのであります」(九冊目 p.301)などが挙げられる。

この大きな存在は、相互扶助の関係(自他を生かす)を基礎にしており、共通点・同じ利害を持つある種の共同体と似ているところもあるが、人間の公平・無我且つ至誠の精神から出ずるところの共同体という面が強い。ここで言う大きな存在は、私的な関係を越えた広い意味での共同体である。そのため、道徳的行為の必要性は特定の人々に限定されない。慈悲をもとに、「最高道徳は、(中略)その根本の精神に慈悲を持ち、人心を開発もしくは救済するということがそのすべての動機及び目的であります故に、その至誠はおのずから発して、まず四圍の人心を感化し、ついに延いて全世界に及ぶのであります」(八冊目 p.374)、「最高道徳は、常に世界人心の開発もしくは救済ということを念頭に置くのであります」(九冊目 p.383)、「最高道徳の実行者は常に自己を忘れて人心の開発、世界の平和及び人類の幸福を楽しみにして生きており」(九冊目 p.349)、「真に至誠及び慈悲の精神を有し、真に伝統もしくは準伝統を尊重し、且つ人心の開発もしくは救済に心を傾け、世界の平和、人類の幸福を希う(後略)」(八冊目 p.128)、「最高道徳にていわゆる慈悲の人とは聖人の教えに従い、よく伝統に奉仕し、且つ世界の人心を開発もしくは救済しようという偉大なる希望の上から、他人を愛する(後略)」(九冊目 p.289)というような、広い範囲の人々の人心開発・救済を目的にしている。

『論文』では、他者に関心を向け、外部の世界や他者と関係を持つようとする人間、周りの人々をどのように感化したらよいのかを考えたり、他者の幸福も願う生き方をしている

人間、他者に与える自分の影響などを深く考察する人間、何事も自分の主観的・感情的な、狭い範囲ではなく、広い視野で見ようとする人間が描かれている。その要因は大きな存在の一員であるという認識にも関係していると言える。その人は、他者の幸福を願い、広く無条件に他者を愛することができ、他者の幸福を自分自身の幸福と同じように重視していること、他者の成長も自分の成長と同じぐらい重要なものとしているゆえ、他者に積極的に関与しようと努め（人心開発・救済）、彼ら彼女らのことを深く配慮している。

さらに、『論文』では、自分のあるべき姿について考えたり、自らの存在に目標を与え、自分の一生を意義のあるものにしようと願い、人生に使命感を持って生きている人間が描かれている。その人は「最高道徳をもってその人心を開発し、更に進んでこれを救済する（後略）」（四冊目 p.167）、「自分に従来より高き徳を涵養することを要します。（中略）一般人を愛し、さらに時機を待ってその人の救済に努力するのであります」（八冊目 p.218）。人類のために役立つことを自分の使命として確信し、それを果たそうとする強い気持ちだが、大きな存在の一員であるという認識から生まれているように思える。

（3）将来への確信

『論文』で描かれている品性の高い人は心の中が安らかで、人類の安心・平和・幸福実現に向かって努力し、未来を志向している。今現在の境遇に左右されるのではなく、未来は自分の心づかいと行いにより展開されると確信している。自分の人生の環境（良好な人生）を選ぶのは自分自身であり、すべてのことは自分自身に反省するとし、自分の精神と行いが原因となって必然的な結果がもたらされる（人間の精神作用及び行為に因果律の存在する）という自覚や「生かされている」という自覚から、安らかで平和な心を得ている人間である。この安らかな心の中心的な部分は、前途を明るくものとして受け止めた、未来への確信から生まれる安心感であるように思える。

因果律を確信することにより、大きな安心が生まれ、大きな精神的な安定という安心感の上に、人間として少しでも「恩返し」しようとする意志や、「人のために尽くそうとする人心救済」の気持ちという、大きな目標を持って生きようとする「立命」の気持ちが出来て来るように思われる。

『論文』では、道徳実行の結果について、「真の完全なる安心、平和及び永久の幸福」（一冊目 序p.8）、「万世不朽」（一冊目 序p.36）、「個人及び団体の安心・平和・秩序及び統制」（八冊目 p.434）、「大なる自由と権利とを獲得する」（七冊目 p.198）などのようにありありと描かれている。具体的に、「唯心的安心立命」「科学的安心立命」という用語が用いられている。両方の安心立命は、単なる希望や期待ではなく、固い信念のようなものと思われる。

「安心」は道徳実行の結果に対する肯定的評価から生まれる安心であり、人類の安心・平和・幸福のために自分は道徳を実行する（犠牲を払う、報恩、人心開発救済）という決心からくる安心であり、今までの自分の精神作用と行いによる自分の運命を（原因）受け止めることから来る安心である。「立命」は自分が何のために生きているのか、自分の役目を意識し果たすということの意味としていると理解できる。

科学的安心立命とは、「品性の完成を主として欲望に熱狂することをやむれば、おのずから確実なる安心を得且つ具体的に幸福を享受し得べし」（八冊目 p.393）、「いかなる困難あるも、これ（引用者注：最高道徳）を実行するものは最後の勝利を得る（後略）」（八冊目 pp.393-394）という意味である。一方、唯心的安心立命について『論文』では、「人生の大困難に遭遇して一步をも前進することあたわざる場合に臨み、全く物質の世界を離れ、神に信頼し、しこうして自己の至誠且つ慈悲の力のみにより、人心の開発もしくは救済に従事して、自己の品性を再造し、もって新生涯を開かんとする一種の熱烈なる信仰を指すのであります」（八冊目 p.426）と説明されており、どんな境遇にあっても、慈悲心をもって自他の心を育てようとする人間が描かれている。

この両方の安心立命は、「因果律の基礎の上に立っている」実際的な安心立命であり、人間が心を磨き、人類の生存・発達・安心・平和・幸福の実現に寄与できる高い道徳性へ到達できるというような信念から生まれる安心立命であると解釈できる。この高い道徳性とはどのような心の境地を示しているのか。それは、寛大で慈悲深い心であったり、無私の精神であったり、真の至誠心であったり、自我没却であったりする。一語で言うと「低い優しい柔らかかな心」（八冊目 p.285）である。このような心を体得し、「品性完成に近づくことができる」という信念が、自分の精神や行為を自ら正しく導いていく上で大切であると考えられる。「高い道徳性」に到達できるというような確信は、未来を志向し、「品性完成」という高い志に動機づけられ、自分自身の成長の可能性を信じ、建設的で主体的な生き方ができる人間形成に影響を与えるように思える。

（4）道徳的勇氣

『論文』で描かれている品性の高い人は、内面的に自分の所属する団体や文化、習慣を尊重するが、それに囚われることはなく、明確な価値判断の基準（義務先行、自然の法則など）により、どんな状況においても、自分の心（道徳心）により導かれ、人心救済のために、あらゆる問題や人を受け入れ、良い方向にとらえているようにうかがえる。すべてを受け入れ、良い方向にとらえることは、そう簡単に到達し得る境地ではない。それには勇氣が必要である。

『論文』では勇氣について七冊目第三目「真の慈悲には真の勇氣を伴うを要す（中略）」で「単に慈悲のみにては足らぬので、必ず正義と慈悲とに立脚する真の勇氣を要する。勇氣なくては、最高道徳を他者の心に移植することはとうてい出来ませぬ。且つ勇氣なくては自ら最高道徳を実行することは出来ませぬ」（七冊目 pp.114-115）、「自分の最高道徳の実行に対して、家族・親族・先輩・友人等の反対嘲笑ある場合に勇氣なければ、最高道徳を棄てて、再び利己的に復するのであります」（七冊目 pp.115-116）、「いかなる事あるも、内心においては一視同仁の大慈悲心をもって、敵にもせよ、味方にもせよ、これを愛することが根本的に必要であります。かくてこの大慈悲心こそ真の勇氣の根元である（後略）」（七冊目 p.117）、「他に率先してある罪惡を発見する不徳の人は多々あれど、他者の善を発見してこれを顕揚する人は極めて少ないのであります。しこうして他人に率先して善をな

すということは真の勇氣ある人でなければ出来ぬことであります」(九冊目 p.327)と述べられている。

正義と慈悲に立脚する真の勇氣とはどのようなものだろうか。これには自他ともどもに品性の向上を強く願う願望が必要とされる。さらに、上述の未来への確信が必要とされるであろう。自己の道徳的行為の結果にかかわる未来への確固とした確信により、それが、どんな障害にもくじけずに前進してゆく大きな勇氣として身に付けられるように思える。

そのほか、すべてを感謝して受け入れ、相手の非を責める前に、まず自己の非を探す精神を身に付けるにも勇氣が要る。人間として生きている以上は私心が働くため、自己の利益や欲望にとらわれずに生きるには勇氣が要る。どんな場合でも、平常心を保ちながら相手に感化を与えようとするには勇氣が要る。仲のよしあしなどの自らの感情にとらわれることなく、物事を正しく判断するにも勇氣が要る。

これらの勇氣について、『論文』では「真に救われた人は、他人の過失・欠陥もしくは不正を挙げ、これに対して不平を懐くごときことはないであります」(八冊目 p.240)、「その先方の人の学問もしくは道徳心が低くして欠点はあっても、その人の祖先以来の徳の高きことを考えて、(中略)その人のなすところに留意してその善所を学び、もって自己の欠点を補うことを勉め(後略)」(八冊目 p.245)、「品性は低く、その徳は極めて少ない人も、義務先行をなして得たところの権利の持ち主であるので敬愛し、最高道徳をもってその人の精神を救済せんことを心がけねばなりません」(六冊目 p.67)、「何人にも自分を措いて専心他者の幸福のみを祈る心が出来て、はじめてその人は最高道徳に真に救済された人であります」(七冊目 p.254)、「(前略)最高道徳においては、自己の困難に陥るときもしくは自己所属団体の紛擾に当たりて、自己の利益を図るがごときことは、根本原則としては許さぬことであります」(八冊目 p.343)と述べている。『論文』における勇氣についてさらに理解を深める必要がある。

4. むすびに

本稿では、廣池が『論文』に描写する品性の高い人間の一部の特徴について取り上げた。『論文』に描かれている人間は、心の成長という志に動機づけられ、自分だけに集中せず人類の未来を志向して、慈悲、人心開発救済、義務先行、伝統報恩といったしっかりとした道徳的基準を持っている。この人間像から筆者自身も学ぶことが多かった。ここで述べられている人間像は、人類の視野から自他ともに良い生き方を実現するという基準で物事を考えることや、ルールや規則など外的な力だけではなく、自分自身の道徳心により自分を導くことの大切さ、しっかりとした道徳的基準を持つこと、常に自己反省を心がけることの重要性を示唆している。

『論文』では、心づかいを「人間のすべての行為の原動力たるところの知見、認識、感情および意思のごときもののすべての精神的機能の発作状態を含んでおるのであります」(九冊目 p.36)ものとして広く捉えている。さらに、道徳実行の効果も一代で終わるのでは

なく、代々続くとして捉えていることが道徳を考える上で重要な手がかりである。

このような理論から、道徳そのものについて考えさせられるところもあった。モンゴルでは社会がどれほど十分に道徳的環境を満たすかというように、社会的・文化的・習慣的制約への協調に重点を置く傾向がある。そして、道徳は個人の問題というより社会の問題として取り上げられることも増えてきているように思われる。それに対し、『論文』では、道徳は社会から強制したり、義務として押しつけたりするものではなく、個々人の意志によるものとして主張しているところが重要なポイントであり、自発的な道徳実行の方法、心構え、ものの見方などを具体的に示していること等、私たちに教えるところが多い。

本稿で取り上げた品性の高い人の特徴は『論文』から読み取った一部の特徴であり、さらに理解を深める必要がある。今後も『論文』における品性の高い人の心づかいに関する研究を続けながら、それを参考に、道徳教育で取り上げる徳目をどう構造化すべきか、主人公に自己を投影させ道徳の問題について児童生徒に考えさせる道徳の授業や資料などにおいて、高い道徳性を備えた人間をどう描いていくべきかについて考えていきたい。また、学術書の公刊などを通じて、本稿で得られた知見をモンゴルの研究者・教育者に広く問い、共有していきたい。